

第一回「ウーマン・イン・モーション」フォトグラフィー賞の受賞者スーザン・マイゼラスがアルル古代劇場で、写真家としての人生を語りました。

2019年7月2日、50周年を迎えたアルル国際写真フェスティバルで、ケリングおよび実行委員会は「ウーマン・イン・モーション」フォトグラフィー賞を写真家スーザン・マイゼラスに授与しました。授賞式のスピーチで、マイゼラスは2,000人を超える聴衆を前に、自身のキャリア、様々な活動へのコミットメント、そして写真家人生における女性の意味について語りました。



Credits : Anaïs Fournié

スーザン・マイゼラスが最初に紹介したのは、現在アルルのエスパス・ヴァン・ゴッホで開催されている『Un retouched Women』展にてアビゲイル・ヘイマンやイヴ・アーノルドの作品とともに展示されている、自身の代表作『Carnival Strippers』(1976年)。「これはフェミニスト議論全盛期の作品です。女性が男性を魅了するために肉体を使う是非、やむを得ず自身の肉体を用いる立場にある性従事者は解放されているのか否かといった議論の中、女性は行ったり来たりを繰り返しながら刹那的に生きていました。いかにして撮影対象の女性たちと関係を構築しようか考え、親しくなっただけからは写真から彼女たちの声が聞こえるような作品にしたいと感じました」。

数年間にわたるニカラグアやクルディスタンでの戦場記録活動の話を終えると、サンフランシスコでドメスティック・バイオレンスの被害者になった女性たちを対象にしたプロジェクト、「アーカイブス・オブ・アビュース」へと話を続けました。「警察の後について、ホテルや様々な場所に行き、記録写真の撮影をしました。警察官の隣に座り、デスクの上に出積みになっている報告書のファイルを見ているうちに、こう

いった写真こそが私が撮りたかったものだ気が付きました。証拠写真は既に揃っていて、証言を集めているところでした。ファイルの一つ一つにそれぞれの人生がありました。そこで警察と協力してコラージュをつくることにしました。このコラージュは当時問題になっていたドメスティック・バイオレンスおよびサンフランシスコ初となる緊急ホットラインの啓発キャンペーンに使用されました」。

次に語ったのは、イングランド北部にあるドメスティック・バイオレンス被害女性のためのシェルターで開いた写真とデッサンのワークショップについて。被害者女性一人一人に長時間にわたるインタビューをしながら、それぞれの部屋と撮影、『A Room of Their Own』というプロジェクトにおさめました。「一人一人事情は異なりますが、シェルターに来ることになった経緯だけでなく、次のステップに進む決意や新しい人生を歩む覚悟について話してくれたことが印象的でした。彼女たちの部屋は鏡のように内面を映し出す、肖像画なのだと感じました。施設の無機質な部屋をどうにか自分なりの空間に作り上げる。がらんだりの部屋を見て、目に映るまま持ち物が少ないんだなと思うこともあれば、逆にここでの滞在が長くないようにしているんだなと感じることもあるでしょう。撮影をする際の遵守事項はシェルターの場所を言わないこと。彼女たちを守るために、居場所を知られないようにしなければなりませんでした」。

マイゼラスは最新プロジェクトの『Eyes Wide Open』で話を締めくくりました。『Eyes Wide Open』は非常に難しいプロジェクトです。なぜなら目だけでなく心の目も開かなくてはならないからです。仕事をする上で常に自分に言い聞かせているのは、目を見開き続け、話を聞き続けられるか。秘密にしていることや禁止されていることを表沙汰にできるかどうか。正解はいまだに分かりません。そういった意味で私は「ウーマン・イン・モーション」(躍動し続ける女性)で、このままのスタンスで歩み続けたいと思っています。この道に同行してくれる人すべてに感謝します。皆さんの中に私の古くからの友人がいますね。人生を歩むには、友人が必要です。ありがとうございました」。

スーザン・マイゼラスについて

1948年米国ボルティモア生まれのスーザン・マイゼラスは、ニューヨークを拠点に活動しているドキュメンタリー写真家で、様々な著作があります：『Carnival Strippers』(1976年)、『Nicaragua』(1981年)、『Kurdistan : In the Shadow of History』(1997年)、『Pandora's Box』(2001年)、『Encounters with the Dani』(2003年)、『Prince Street Girls』(2016年)、『A Room of Their Own』(2017年)。

共同編集した2作品、『El Salvador, Work of 30 Photographers』(1983年)と『Chile from Within』(1990年)は、2013年に電子書籍として再出版されました。また、リチャード・P・ロジャースとアルフレッド・グゼッティと共に、『Living at Risk』(1985年)と『Pictures from a Revolution』(1991年)という2つの映画作品の共同監督を務めています。

スーザン・マイゼラスは中南米の人権に関する作品で知られており、その写真はアメリカのコレクションと国際コレクションの双方における主要作品となっています。1992年にはマッカーサー賞を受賞し、2015年にはグッゲンハイム奨励金が授与されました。また、2019年度ドイツ取引所写真財団賞も贈呈されています。

バルセロナのアントニ・タピエス基金博物館、パリのジュド・ポーム国立美術館、そしてサンフランシスコ近代美術館では、スーザン・マイゼラスの1970年代から現在までのライフワークを展示した『Meditations』展が最近開催されました。

「ウーマン・イン・モーション」について

ケリングでは、最優先事項として女性のための取り組みを行ってきました。「ウーマン・イン・モーション」を通じて、この活動は芸術界や文化業界にも広がりを見せています。変化をもたらすうえで、創造性は非常に強い力を持ちますが、男女不平等に関しては今だ目に余るものがあります。ケリングは、カンヌ国際映画祭のオフィシャルパートナーとして、映画界の表舞台や舞台裏で映画界に貢献する女性に光を当てべく、2015年に「ウーマン・イン・モーション」を発足させました。以来このプログラムは、写真、芸術、文学業界を含む分野に拡大し続けています。アワードは、刺激を与える人物や若く才能ある女

性に授与されます。またトークを通じて、スクリーンの中や映画産業全般における、女性の表現について著名人らが意見を交わす機会を提供しています。過去5年にわたって「ウーマン・イン・モーション」は、思考を変え、リーダーシップを発揮し、あらゆる芸術分野における女性に与えられた役割と認知を提供するプラットフォームとしての役割を果たしてきました。

ケリングについて

ケリングは、ファッション、レザーグッズ、ジュエリー、ウォッチ製品を扱うメゾン、およびケリング アイウェアを擁するグローバル・ラグジュアリー・グループです。傘下のブランドはグッチ、サンローラン、ボッテガ・ヴェネタ、バレンシアガ、アレキサンダー・マックイーン、プリーオーニ、プシュロン、ポメラート、ドド、キーリン、ユリス・ナルダン、ジラルール・ペルゴ。シグネチャーである、「empowering imagination イマジネーションをその先へ」のとおり、ケリングは想像力を伸ばし、明日のラグジュアリーを創造することで、ブランドがその可能性を最もサステナブルな方法で実現するよう後押ししています。

アルル国際写真フェスティバルについて

1970年に発足された写真に特化した夏の祭典。アルル国際写真フェスティバルは写真におけるクリエイティビティあふれる新進気鋭のフォトグラファーを紹介することで国際的に知られています。毎年、アルルの街に点在する歴史・旧跡において40近いエキシビションで約250名のアーティストによる独自の背景を備えた作品を展示しています。本フェスティバルは写真界での最新動向を紹介すると共に、若手のアーティストにとっての登竜門ともなっており、写真というメディアの意義を考察する重要なイベントとなっています。

詳細情報

*Women In Motion*のプレス向けセクションをご覧ください

オフィシャルハッシュタグ

#WomenInMotion #Kering

ケリング問い合わせ先

Emilie Gargatte +33 (0)1 45 64 61 20

emilie.gargatte@kering.com

Eva Dalla Venezia +33 (0)1 45 64 65 06

eva.dallavenezia@kering.com

アルル国際写真フェスティバル

Claudine Colin Communication | +33 (0) 1 41 02 60 01

Alexis Gregorat | alexis@claudinecolin.com

Marine MaufRAS du Chatellier | marine.m@claudinecolin.com

Facebook : keringgroup
Instagram: @kering_official
Twitter: @KeringGroup
YouTube: KeringGroup
www.kering.com